

P10-110

放射線部門における医療経済について

横浜市立みなと赤十字病院 放射線科部

〇猪狩 三朗

【背景】医療界を取巻く環境には厳しいものがあります。まさに学会テーマの「医療の荒波」が打寄せ続けている状況にあり、医療従事者にも経営的感覚が求められています。当然、多くの高額医療器械を扱う放射線技師にも高い専門性とともコスト意識を持つことが要求されていると思われます。

【目的】医療の質の低下を招かない範囲内で、放射線部門コストの低減をはかり当院の利益率向上に貢献する。

【対象】当院（横浜市立みなと赤十字病院）は、平成17年4月開設の病床数634床、診療科目23科の病院であり、電子カルテシステム・RIS・フィルムレス運用を行っている。救命救急センターあり。DPC導入。放射線科設備機器は、MRI2台、CT3台、TV系5台、一般撮影系5部屋、乳房撮影室2部屋、他、骨密度測定室などあり。SPECT装置1台、放射線治療装置1台、血管撮影室3部屋。

【結果及び考察】紹介画像データのCD化、救急センターにおける検査材料の見直し、オーダーリングシステムの点検・見直しなどを行った結果、コスト低減や請求不足診療報酬の発見に繋がった。診療放射線技師（医療従事者）は、高い専門性と共に算術的な知識を備えることも必要で、診療報酬制度、DPC制度を理解し、同時にコスト意識を持つことは病院経営の健全化に寄与すると思われる。

P10-112

新型インフルエンザA (H1N1)に対するオセルタミビル予防投与の有効性と問題点

徳島赤十字ひのみね総合療育センター 薬剤課¹⁾、

看護部²⁾、小児科部³⁾

〇浜田 茂明¹⁾、森本 真仁¹⁾、山川 政江²⁾、森 恭子²⁾、

小島 泰代²⁾、内藤 悦雄³⁾、橋本 俊顕³⁾

【背景】平成21年8月22～24日、当センターにおいて入院患者6名が新型インフルエンザA (H1N1) (以下、新型インフルエンザ)に感染したため、オセルタミビル1回2mg/kg/日を1日2回5日間投与した（治療投与群）。感染の拡大防止のため、発生病棟の他の入院患者にオセルタミビル予防投与として治療投与の1/2量を10日間投与中、新たに4名が新型インフルエンザに感染した（予防投与群）。また、発生病棟に関与する医療従事者には予防投与のため、オセルタミビル75mgを1日1回10日間を処方した。

【方法】1.治療投与群および予防投与群の新型インフルエンザ感染者の1日最高体温の経時変化の比較 2.オセルタミビル予防投与を行った医療従事者94名へのアンケート調査による実際の服薬日数および有害事象の調査

【結果・考察】治療投与群および予防投与群の新型インフルエンザ感染者の最高体温は、それぞれ38.2～40.2℃（平均39.2℃）および37.9～39.0℃（平均38.4℃）、最高体温が37℃以下になるまでの日数はそれぞれ3～12日（平均7.3日）および1～4日（平均2日）で、予防投与の有効性が確認された。医療従事者へのアンケート調査により、49.4%の医療従事者にみられた有害事象は、オッズ比7.7 (p<0.05)で男性より女性に多くみられた。主な内訳は胃部不快感27%、倦怠感17%であった。また、オセルタミビルの予防投与量を10日間服用した医療従事者が32.6%であったにもかかわらず、インフルエンザ感染が認められなかったことは、手洗い・うがい・マスク着用の有効性を再確認することとなった。

P10-111

抗菌剤届け出100%にむけての取り組み

釧路赤十字病院 薬剤部

〇高柳 昌宏、品川 博行

病院の感染制御は重要な課題である。当院においてもMRSA血流感染や多剤耐性緑膿菌(MDRP)検出されその問題にICTが介入し抗菌剤の適正使用などの取り組みが行われている。今回抗菌剤の削減、後発品への切り替え、届け出・許可制抗菌剤の見直しを経て届け出がほぼ100%になっているが、これまでの取り組みと現在の抗菌剤の使用状況と薬剤感受性について報告する。当院においてカルバペネム系薬は市販されている5種類すべて採用されていたが3種類とし他剤についても削減した。バンコマイシンを含め数種類の後発品の切り替えもあり院内採用抗菌剤の周知徹底を行った。オーダ入力時に注意事項（届け出が必要と）を表示した。リネゾリドは許可制としMRSA薬また1部緑膿菌に使用する抗菌剤やキノロン系薬剤11薬剤を届け出制とした。薬剤部において初回使用時のチェック、服薬指導支援ソフトのファーマロードを活用し届け出薬剤使用患者の把握に努め、未届けについては医師に連絡する体制をとることで「医療安全・知恵の輪」に御紹介できるほどの提出率になった。しかし、抗菌剤の届け出100%が目標ではなく、いかに早く使用して早くやめるかが目的であり届け出制は抗菌剤使用の入り口としてチェックに使用している。この結果、院内において緑膿菌の感受性がよくなり、MRSAの割合も入院においては40%と改善されている。また、2009年9月より多剤耐性緑膿菌(MDRP)の分離報告はない。

P10-113

自己調製した消毒用エタノールの経時的濃度変化の検討

武蔵野赤十字病院 薬剤科

〇加藤 智之、石濱 賢二、堀 治

【背景・目的】エタノールは、速やかな殺菌性、広域な抗微生物スペクトル、および低毒性などを有す中水準消毒薬である。当院薬剤部では、70vol%消毒用エタノール（以下、EtOH）を調製し、日常業務に使用している。薬剤部で混合した注射医薬品を病棟へ搬送する際、混注口にEtOHに浸したポリエチレン袋を覆い被せている。ポリエチレン袋、およびEtOHは1日毎に交換しているが、EtOHに含まれる残留エタノール濃度、およびその有効性についての検討などは行われていなかった。今回このような注射剤混合業務において、自己調製したEtOHの濃度が時間経過とともにどのように変化し、消毒効果を示す濃度を保っているか検討し、その結果を報告する。

【方法】無水エタノールより調製したEtOHをポリエチレン袋に入った万能壺へ100mL分注した。実際の使用環境下に設置し、午前、午後それぞれ30分、および1時間蓋を開封した（検体：A～D）。それぞれの壺からEtOHを5mLずつ採取し、冷暗所に保存した。7日後、ガスクロマトグラフィにて分析を行った。

【結果・考察】各サンプルにおけるエタノール含量は経時的に減少したが、実験開始2日目までは、EtOHに含まれるエタノールは70%前後存在した。

このことから、実際に薬剤部で運用している期間では、混合した注射医薬品に使用しているエタノールの消毒効果は期待できるものと考えられた。

また、医療器メーカーより販売されている滅菌シールは高価であるが、当院で採用しているポリエチレン袋は1枚あたり1円程度と非常に安価である。

以上より、当院で運用しているEtOH、およびポリエチレン袋は医薬品の汚染を防ぎ、かつ経済的にも優れていることから有効な手法であることが示唆された。